

2 仮名を味わおう

書写の教科書では「仮名の誕生物語」（P38）というコラムで仮名の成り立ちを紹介しています。また「昔の人が書いた文字を見よう」（P57）では、江戸時代の作品を掲載しています。今回は、平安時代に完成した仮名の最高峰である「高野切」、雅な王朝貴族文化の象徴でもある「元永本古今和歌集」、そして実用の書として親しまれた江戸時代の作品を例に、仮名の美しさとその魅力についてお話したいと思います。

1 仮名の成り立ち

私たち日本人は、母語を表記するための独自の文字をもっていないませんでした。中国から漢字が日本に伝わると、その音を借りて日本語にあてることができ、漢字を用いた日本語の表記が可能になります。やがて文字という概念と、言語表現としての機能が理解され、漢字が定着すると、今度はそこに日本独自の美しさを盛り込む意識が生まれ、優美にして華麗な日本独特の文字が誕生します。それが仮名で

す。もとは漢字を借りて表記したことより、借りた文字の意である「借名」が転じて「仮名」となりました。ちなみに漢字は「真名」（真の文字）といえます。仮名ははじめ、楷書や行書で書かれて

いました。『万葉集』においてこの字体が多く使われていたことから、「万葉仮名」と呼ばれています。また、楷書を真書ということから「真仮名」、あるいは「男手」ともいいます。

平安時代になると、仮名は草書で書かれるようになります。これを「草仮名」と呼びます。表意文字ではなく、表音文字として日本語にあてると、煩多な文

字ではなく、簡素化を進め、効率良く書き進められる文字が必要だったのでしよう。

仮名の発達は、平安時代の国風文化と大きく関係しています。仮名の興隆により、和歌や手紙、日記、物語などの文芸が発展し、それらを速くそして美しく書くことと、草仮名をさらに大胆に簡略化して書写されるようになります。これを「女手」といい、これが今日の「平仮名」に相当します。

2 仮名の完成 —平安時代—

平安時代の後期に、仮名の姿は完成しました。その頂点に位置する名品が、現存する最古の『古今和歌集』の写本である「高野切」です【図1】。柳の枝のようになややかな線が、よどみなく流れながらも、墨継ぎの濃い部分がアクセントになり、強弱の微細な変化をもたらしています。全体的にスピード感のある送筆です。鋒先のきいた、繊細でのびやかな線質、たおやかな連綿（続け字）の美しさなど、仮名の魅力を最大限に引き出している作品であり、仮名を学ぶための最良のお手本です。

「高野切」が書写された十一世紀半ばには、日本的優美な感性がうかがえる仮名が展開していきます。

仮名が完膚なき姿として完成された平安時代の後期には、意匠を凝らした装飾料紙が用いられるようになります。仮名を味わうもう一つの見どころが、この装飾料紙の美しさです。色とりどりの染紙や、型文様を摺り出した料紙、切箔をまき散らした料紙などが使われるようになります。【図2】は『古今和歌集』が

ウェブではご覧いただくことができます。

▶図1 高野切（東京国立博物館蔵 部分）

ウェブではご覧いただくできません。

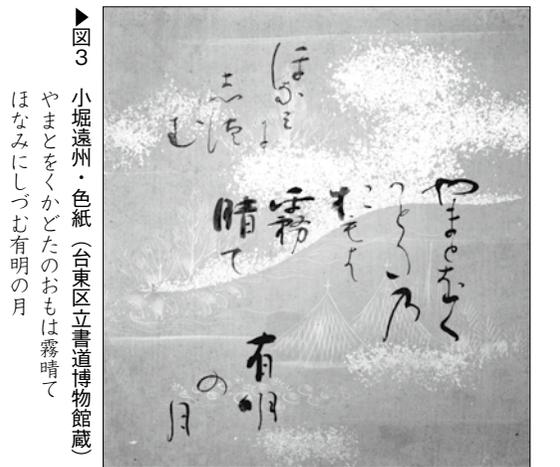
▶図2 元永本古今和歌集（国宝 東京国立博物館蔵 部分）

原装のまま完全に残っている最古の写本「元永本古今和歌集」です。料紙の色は赤、白、緑などをベースに濃淡の変化があり、文様は唐草や波、菱文様、亀甲文様などが施され、さらに金銀の切箔や砂子などがまかれるなど、さまざまに裝飾されています。料紙の色調に合わせて墨を濃くしたり、筆圧の強弱をつけたりと、裝飾料紙の特色を活かして書かれた仮名はよりいっそう輝きを放ち、表現の幅も広がっていきます。王朝貴族の美意識の高さを如実に物語る好例といえるでしょう。十二世紀の仮名は、多くの作品がこのような美麗な料紙に書写されています。

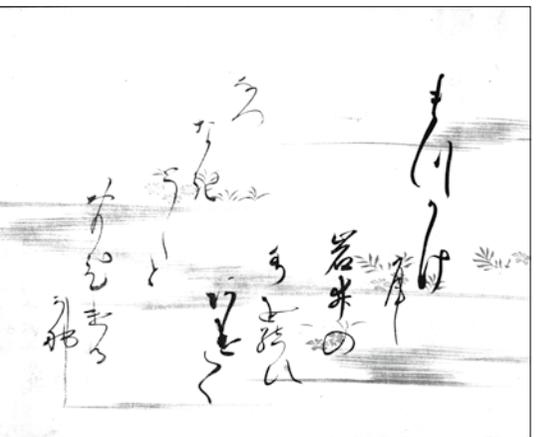
3 伝統と実用の仮名 —江戸時代—

江戸時代は、天皇や公家によって脈々と受け継がれてきた平安時代後期の伝統的な仮名をもとに、美しさと強さを兼ね備えた、躍動感あふれる個性的な仮名が出現します。

【図3】は、江戸時代の大名で茶人として知られる小堀遠州が、和歌を色紙に書いたものです。鎌倉時代の歌人・藤原定家の書風は、後に定家様という一つの



▶図3 小堀遠州・色紙（台東区立書道博物館蔵）
やまとをくかどたのおもは霧晴て
ほなみにしづむ有明の月



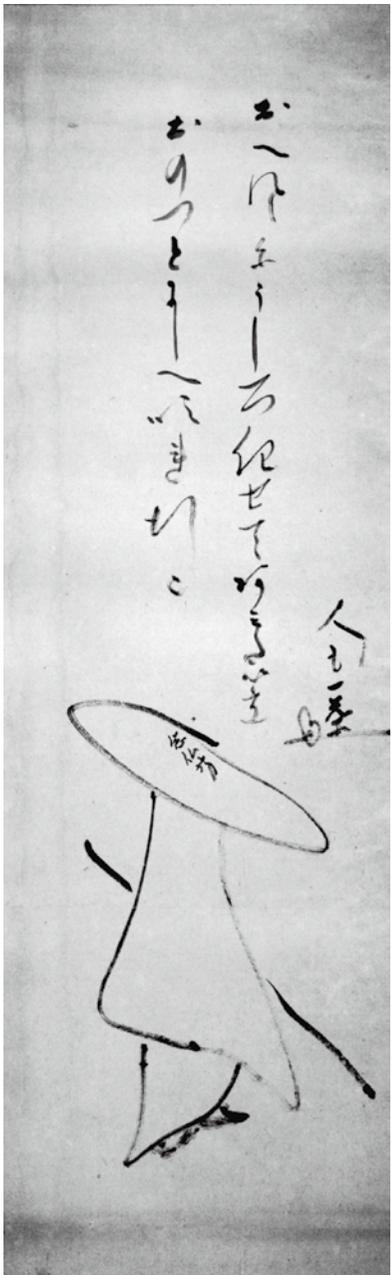
▶図4 松花堂昭乗・書巻（台東区立書道博物館蔵部分）
まつかげに岩井の水を結びあけて
なつなきとしとおもひけるかな

様式として確立しますが、小堀遠州の書風はこの定家様を踏襲したもので、コロコロとした個性的な文字を書いています。三段に分けた紙面構成で、二段目の「やまとをく」が書きだし、そして上段、最後が下段の順に書かれています。

【図4】は、寛永の三筆の一人、松花堂昭乗の卷子本です。伝統的な書を学び、後に松花堂流（滝本流）という独自の書風を編み出しました。この和歌の文

字配列も特徴的で、右上から左下に向けて斜めに線を引くと、上の句が右下の三角形の中に、下の句が左上の三角形の中にそれぞれおさまっています。また、前半は墨をたつぷりとのせ、大らかで力強く、後半は女手のように細くキリリとした線と美しい連綿でまとめ上げています。上の句と下の句の対照的な構成もまた見どころの一つでしょう。

最後に、今年生誕二百五十年を迎えた



▶図5 小林一茶・短歌軸（台東区立書道博物館蔵）

おへ風にうしろ任せてあみだ笠 おのづとにしへ吹れ行也

小林一茶の掛け軸を紹介しましょう【図5】。上段の和歌は、おっとりとした書風で書かれ、まさにふわふわと風に吹かれるままの雰囲気がよく出ています。下段には、笠をかぶった念仏坊が描かれています。そして書画ともに一茶がかいたことを知らしめるかのように、「人も一茶」という花押入りの署名を冒頭にもつてきていますが、結果として、和歌と念仏坊と署名の配置は絶妙な位置関係になっていきます。右下がりに傾いた念仏坊の笠の上に来た空間を利用し、そこに署名を書き入れるあたりに、一茶らしい個性的なバランス感覚を見ることが出来ます。一茶が心から楽しんで書いている微笑ましい作品です。

平安時代以降、書は上流階級の人へのみ書かれていましたが、江戸時代になると寺子屋での習字教育が盛んになり、書が一般庶民にまで普及しました。特に松花堂昭乗の書は手本としても広く学ばれ、実用性を伴いながら伝承されていったのです。

江戸時代の仮名に触れよう

書道博物館企画展
「中村不折コレクション 江戸ワールド」のご案内

現在、台東区立書道博物館の企画展「江戸ワールド」（～9月25日まで）において、今回ご紹介した江戸の名品が展示されています。墨の濃淡や線の強弱、文字の配置、連綿の美しさなど、本物でなければ味わえない、日本人特有の仮名の世界の奥深さを間近で見ることができます。みなさんも博物館を訪れて、日本人のアイデンティティーを探してみませんか。

- 台東区立書道博物館
- 入館料：一般 500円(300円) 小・中・高校生 250円(150円)
※()は20人以上の団体料金
 - 開館時間：9：30～16：30（入館は16：00まで）
 - 休館日：月曜日
 - 電話：03-3872-2645
 - アクセス：JR鶯谷駅から徒歩5分
 - HP：<http://www.taitocity.net/taito/shodou/index.html>